

“持続可能な社会を目指すスウェーデン市民と出会う旅”に参加して

壱岐 あい子

2月4日に日本を出発し、リボーンツアーを通して、初めて北欧の世界を体感してきました。帰国して、何より強く思うことは、この7日間で思っていた以上に、持続可能なエネルギーについて学び、考え、メンバーみんなで見聞を共有でき、楽しみながら様々な話を吸収できたということです。

ストックホルムではゴミ捨て場を見に行き、分別がとてもしっかりされていることに驚きました。ゴミがお金になるというシステムがあることにより、市民にも分別をするということが根付いていると知り、日本でもこのシステムが導入されれば少しは分別が根付くかもしれないと感じました。それに、このゴミたちがエネルギーとして再利用できるということがとても素晴らしいと感じました。ゴミを捨てることで、お金がもらえ、尚且、エネルギー支援への協力にもなるなら、分別の文化も、ゴミをきちんとゴミ箱に捨てるということも小さな頃から身につけていくと思い、スウェーデンと日本の違いに驚きました。



同日、ACNE というスウェーデンのファッションブランドの古着屋にもいくことが出来ました。日本でもファンの多いブランドで、日本にはまだ単独店はないので、アパレルに勤めている私には凄く参考になりました。ストックホルムにあるファッションの単独店は、どこも大きな看板とかはなく、街中にさりげなく存在していました。慣れていないと探すのは大変でしたが、街の空間を崩すことなく存在しており、素朴さがお洒落に感じました。最近ではスウェーデンファッションにも注目が集まっているので、これからもっとスウェーデンファッションについて調べていこうと思います。



ウプサラでは原子力発電使用済み燃料最終処分場予定地エストハンマーを訪問視察するため、SKB社を訪れ、原発に対する日本とスウェーデンの対応の違いを感じました。スウェーデンはなぜ原発をつくってしまったのかを問い質すのではなく、これからどのように対応していくべきなのかを先を踏まえて様々な視点から考え、着実に議論を進めていました。そのようなスウェーデンでも、最終処分予定地を決めるまでに20年以上もかかっているのに、日本はこれから、現状の対応だけでなく、同時進行で原発問題について考え、進めていかないと、大変な時間がかかってしまうと思ひ不安になりました。その為には持続可能なエネルギーについて小さな頃から学び、原発に頼らない世界作りを進め、作ってしまった原発の処理問題もすべて同時に解決していく必要があります。問わないといけない問題の多さに圧倒されてしまいましたが、日本全体で自分の問題と思ひ、他人事と思わないよう、周りに伝えていこうと思ひます。



ウプサラでは自然学校も行き、凍った湖で氷を彫って遊び、自然の中で遊ぶ楽しさと共に、自然の怖さも同時に学ぶのだと感じました。雪の中にあるテントをみんなで火を囲み、バーベキューをした食事は絶品でした。そこで、“頭でなく、心で学ぶ”“楽しくなければ何の価値もない”という言葉聞いたことを凄く覚えています。見て発見し、人が自然に与える影響を知り、自分が出来ることを見つけていくことを、自然の中で小さい頃から学んでいくことは、今の時代だからこそ大切な教育だと感じました。もっと日本にも自然学校という教育が根付いてほしいと思ひます。



夜の緑の党青年部との交流会では、小串さんと植木さん、大竹さんの素晴らしいプレゼンテーションに感動しました。植木さんの“自然災害には愛がある。原発には愛はない”という言葉に心が痛くなりました。私は、宮城にはボランティアで行き、現地の方から話を聞いたことがありましたが、福島原発による被災者の方の話を生で聞くのは初めてでした。いきなり今までの生活がなくなり、避難生活をおくることになった辛さを聞き、原発がもた

らした悲惨な現状を世界中の人々が知るべきだと感じました。また、このような交流の場に参加できたことにとっても感謝しています。

ウーメオでは、幼稚園の野外活動に参加し、子供たちとともに楽しい時間が過ごせました。雪の上を子供たちと走りまわり、滑り、動物の足跡探し、かくれんぼをして遊び、言葉の壁を超え、とても仲良くなることができました。みんなとても可愛く、無邪気で、目が輝いていました。みんなで自然の中で授業をすることで、教室の囲われた中で学ぶときには体感することのできない学びがあるのだと実感しました。また、ウーメオの町並みはとても可愛く、統一感のある建物に、ピンクや緑、黄色などの壁面の配色が雪模様と合わさり、絵本の中にあるような気分になりました。どこを写真で撮ってもポストカードのようになり、町並みからこの街の温かさを感じました。

今回、スウェーデンに6日間滞在し、知らなかった持続可能なエネルギー製作について様々な視点から学ぶことが出来ました。日本とは考え方が違い、スウェーデンは大変な問題に対しても、フィーカという習慣などから、心にゆとりをあたえることを忘れずに取り組んでいるように感じました。また、ディベートを頻繁に行い、意見を言い合っていることを真似ていきたいと強く思いました。考えを伝えあうことで、視野も広がり、頭も柔らかくなり、新たな発見もできます。日本人にもフィーカは必要です。これから積極的に広めていけたらと思っています。バイオエネルギーにも驚きは大きく、バイオガスのバス、車が街中を多くは知っていることにも感激しました。日本がスウェーデンから学ぶべきエネルギー政策は多くあることを、今回のツアーで感じたので、また暖かい時期のスウェーデンにも行き、新しい発見をしたいと思います。また、今回のツアーに参加し、自分の知識の低さに愕然としたので、もっと持続可能なエネルギーや原発問題など、勉強していきたいと思います。充実したツアーに参加させていただき、ありがとうございました。

